
軌跡　～～不登校の息子へのメッセージ～～

セイデンワコウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軌跡　　〳〳不登校の息子へのメッセージ〳〳

【Nコード】

N8210P

【作者名】

セイデンワコウ

【あらすじ】

息子が不登校になったことで、気づかされた思いやそのことで開かれた「もう一つの感情」を伝えようとしている作品

軌跡

〳〳不登校の息子へのメッセージ〳〳

- 一、涙のわけ「その一」
- 二、聖戦
- 三、出会い
- 四、普通の幸せ
- 五、もう一つの感覚
- 六、涙のわけ「その二」
- 七、愛する人へ

一、涙のわけ「その一」

その日は突然やってきた。

使い古されたこの言葉が、なぜかしっくりなじむ。そう言わずに出来ない気持ちが体中を駆け巡っていった。

「どうして、どうしてなの」

と泣きながら何度も私に問いかける妻。

その涙は、これからの不安を流したいと無言で訴え、それを理解しないと拒み続ける心の抵抗が形に表れたものだった。

二、聖戦

私は、十六年間勤めた企業を退職する。十六年間精一杯走り続けた

世界。妻のため子どもの為に働いてきたこの世界。その世界から卒業することを決めた。

人は、

「どうして、どうしてなの・・・」

と、また使い古されたあの言葉を私に浴びせる。

「給料もいいし、一流企業なのに・・・」

と、浅はかな考えで、その訳を探ろうとする者もいる。

「あなたはなぜ働くのですか、生きるため、それとも金のため・・・」

「

そう聞き直したい衝動に駆られる。「どうして」って何だろう。何を基準に「どうして」を決めるのか。あの言葉を浴びせた人に問いかけたくなる。自分自身にも、使い古された言葉や浅はかな考え、そして心の中から湧き出す疑問の衝動を、何度も己の心に問いかけたくもなった。そして、問いかけた。しかし、その答えは、なかなか見つからない。これからも見つからないかもしれない。ただ、今の私には、どうでもよいことに変わりはない。そう気づけたことは幸いと思えた。この感情だけは、誰にも動かすことのできない事実であることを、十分判っていたから。

私が次に選んだ道は『公務員』である。もう既に三十九歳を迎えていた。なぜ、公務員なのか、そう問われることはいつも決まっている。判っていた。もう何回も・・・。うんざりするほどそう聞かれたからだ。

今考えると、企業戦士（この言葉もすでに死語なのかもしれない）として、戦いに敗れた私にとって選ぶ道は多くなかった・・・私に残された道は、この道だけなのか、と思う不安な日が続いた。強がって「いや違う」と強く心で叫んでみるも、「もうこれしかなかった」とささやく声が、毎日私を悩ませていた。

公務員試験のため、私は二度目の闘いに臨んだ。半年間の戦いだった。その戦いで私は変わったかもしれない。

私は、家族のため企業のため、そして社会のために働いた。バブル

景気崩壊後の不動産業界を正常化、いや清浄化するために。いくつものバブルの遺産を社会に還元してきた。

当時の私は、企業人としての誇りを、この仕事に感じていた。やりがいもあった。でも、何かが違った。違和感があった。どうしても、それを取り除きたかった。やりがいや誇りの為に懸命に戦った。そして前進もした。それでも、私にはその違和感を取り除くことは、できなかった。

その違和感を取り除こうと懸命に戦えば戦うほど、本当の自分と違う人格が現れてきた。それは、家族や社会のために精一杯働いている優等生企業人や、誰かを幸福にしているのだと思う偽善者の仮面を被った人格といえбайだろうか。そんな得体の知れないもう一人の自分が、いつも私の中にいた。この得体の知れない人格と何年付き合っただろう。いつしか、私は、自分でない人格に自分を乗っ取られてしまっていた。もがきながら本当の自分を取り戻そうと必死だった。自分でない人格が現れると、私はギャンブルにのめり込むこともあった。何かに没頭することで、見失った自分を忘れようとしていたのかもしれない。時折現れる本当の自分が墮落した自分を変えようと、努力することもあった。それでも、完全に本当の自分を取り戻すことは出来なかった。そして、自分が望む満足を得ることも出来なかった。別人格である仮面をかぶった企業人の私は、大口の契約を何度も取り、人より早く昇進もした。その時でさえ、本当の満足感は何れなかった。当時、私が感じていたことは、世の企業人が感じていたそれと大きな違いはなかったのかもしれない。しかし、どうしても私は、その仮面を脱ぎ去り、本当の自分を取り戻したかったのだ。

二度目の戦士になると決めた私は、教職という新たな戦場で戦った。勝利の先に何があるのかもわからず、この戦いが、私にとって正しい聖戦なのかも知らず……。迷いながらも無我夢中で戦った。そして、勝利を手にしたとき、今まで感じたことのない満足感を味わうことができた。迷いがなくなった。明るい光が一点を向き、進む

べき道を示してくれたように感じた。

その光は、仮面を通して見た光ではなく、本当の自分を取り戻したことを祝福してくれているように思えた。

そして、確信した。

この戦いは、私にとって聖戦であることを。

三、出会い

第二の人生が始まり、もう五年が過ぎようとしている。私の許を多くの子どもたちが巣立っていった。教授とは『児童・生徒・学生に知識・技能を授け、その心意作用の発達を助けること。』とあるが、私自身が教授されたことは本当に多かった。

子どもは不思議な生き物だ。

純粹無垢でエネルギーにあふれ、その笑顔はだれをも幸せにする、そして同時に残酷で野蛮なエイリアンでもある。そんな子どもたちは、無数の色を持っている。赤や青そして緑や白、さまざまな色がある。赤はエネルギーがあふれ、青は冷静沈着でクールである。緑は協調性のある平和主義者、そして白は、どんな色にも変われる。また、その色は、一人に一色とも限らない。赤かと思うとすぐに青になったり、紫になったりもする。こんなときもある。いろいろな色が混色されよどむことや、変わってほしい色に変わらないこと。

何十、いや何百の変身パターンを持っている。本当に不思議な感じだ。

幸せな子もあればそうでない子もいる。この幸せは私が思う幸せで、本人たちはそれを自覚しているかはわからない。きっと子どもたちは、私が思うより、もっと短い時間の中でそれを感じ、それを味わっているのだろう。

他にも、学習障害いわゆるLDの子もいた。じっとしていられず、すぐにキレる子もいた。寡黙な子やいつも大声で声をからしている

子、その現場にはさまざまな出会いがあった。同時に分かれも体験した。

卒業の日、

『私の懷に飛び込み泣いてくれた。』

『起立の合図で四十の瞳が私の心突き刺した。』

『止まらない涙で子どもたちの顔が歪んで見えた』

この卒業という儀式を通して、子どもたちは私から巣立ち新しい出会いへと進んでいった。

四、普通の幸せ

幸せを手にした者、まだ手にしていない者。多くのことを望み、それを達成しても満足いかず不幸せだと感じる者。生きていることだけで幸せを感じるこの出来る者。もう少しで、手に届く幸せを諦めてしまう者。幸せを自ら勝ち取ろうとする者。幸せ自体が何かわからずにいる者。

人にとって「幸せ」って何だろう・・・

元来、人間は幸せを求めず、刺激を求める生き物ではないだろうか。悲観的に言えば、刺激という欲望を追い求めるハイエナと同じではないだろうか。

人と自分を比べることで、優越感を得ようとする執着心。子どもが時折見せる残酷で野蛮な姿。自分にとって刺激的でないものに見向きもしない無関心さ（まるで、生きた獲物を狙おうとしないハイエナそのもののように・・・）。

これらすべては、人間が刺激なしでは生きていけない証なのではないだろうか。

では、人間は幸せではなく、なぜ刺激を求めるのだろうか。刺激を求めること自体が幸せなのか、それとも幸せには刺激がないからなのか。そもそも何が幸せで、何が刺激なのか、判らなくなる。

幸せの定義は何だ。

『運がよいこと。また、そのさま。』

と、ものの辞書には書かれている。あまりに大雑把でよく判らない。人によって、運がよいことが違うから幸せが違うのか、それとも運がよいと感じる人が違うから、幸せが人によって違うのか、そんなことを言いたいがために、こんなに大雑把な書き方をするのか。ましますわからなくなってしまう。

刺激も、『生体に作用してなんらかの現象や反応を起こさせること』とあるが、こちらにも似たり寄ったりでぱっとしない。あきれそうになる。ただ、『生体に作用して』のくだりは、少し今までの大雑把な説明とは一味違う気がする。生体とは、つまり人間の心と体を意味するのだろう。そうすると、刺激は、人間の心にも作用することになる。そして、それが何らかの反応（感情といってよいだろう）を起こさせる。こう考えると、私の考える刺激とは、人の心に作用し、喜びや悲しみなどの、人だけが持ち合わせた産物である喜怒哀楽の反応を起こさせるものであると定義できる。

少し話しがくどくなったが、この定義が正しいなら、喜怒哀楽を感じる心を持ち合わせていることが、『幸せ』なのかもしれない。わが子がすくすくと成長していく様を喜びと感ずることや、わが子が経験する苦難を、自分の苦難のように感ずることなど、自分の感じる感情すべての中に『幸せ』が隠れているのかもしれない。もしくは、自分が持ち合わせた感情そのものが、幸せなのかもしれない。はじめは、小さな幸せに満足する。でもすぐに、その幸せでは満足できなくなる。そして次の幸せを探そうとする。この繰り返しを、人は生が終わるまでずっと繰り返すのかもしれない。そう考えると、少し答えが見えてくるような気がする。

人間、人は望めば望むほど、刺激を求める気持ちが大きくなる。次は満足できると根拠のない言い訳を何度も繰り返しながら、それを求め続けようとする。アルコール中毒患者や覚せい剤常習犯が見せる禁断症状のように。そして、どんどん幸せを見失ってしまう。

『大切なものは、失ってみたいと判らない』とよく言われるが、この大切なものを、実際に失ってみたいと、この言葉も実感できないのも当然だ。つまり、幸せを見失ってしまうことで、幸せの中の『普通の幸せ』の大切さに気づくのである。

愛する家族がいて、一定の収入があり、毎日の食に困ることなく安全に暮らしていること、これが私にとっての普通の幸せだ。

五、もう一つの感覚

「人の気持ちがわかる人になりなさい」

と、口にする者は多くいる。特に、少しの教養を持ち合わせた者がよく口にする言葉だ。私などの教師もその部類にあたると思う。

確かに、このような人になることは決して間違ったことではないし、悪いことでもない。しかし、そう簡単になれるわけではない。

「人の気持ち」と表現されるが、気持ちとは、「人の感情」のことなのか、それとも、そのときの「人の考え」なのか、それすらもわかりにくい。もし、人の感情ならば、かなり手ごわいものになりそうだ。何しろ、その人の表情やしぐさなどから色んな感情を推理しなければならぬからだ。また、人の考えにしても、その場の状況を判断し、もっとも適当であると思われる回答を用意しなければならぬ。いずれにせよ厄介なことに変わりはない。

私は、「人の気持ちがわかる」つまり、人の気持ちを察したり、共感できたりするには、ある条件が必要ではないかと考えている。その条件とは、まず、自分がその人と同じような体験をした事があること。次に、その人より出会えた人の数が多いこと。最後に、幅広い異年齢層の人と触れ合えていることをあげたい。

もう一つ考えがある。人の気持ちがわかるためには、人が持っている五感と、「もう一つの感覚」が必要ではないだろうか。特に、私は「もう一つの感覚」を大切にしたい。もう一つの感覚とは、言

い換えれば感性とでも言えばいいのか、それとも、生きてきた軌跡とでも言うべきか、表現が非常に難しい。一言では言い表せないものだ。具体的に、こう説明しよう。

私は教師という職業柄いろいろな境遇を持った子どもたちと出会う。たとえば、何らかの理由で学校に登校できない子ども、いわゆる不登校児童だ。この不登校児童には、二つのタイプがあるといわれている。それは、いじめなどが原因で「学校に行けない子」と、学校に行く目的を見いだせなかったり、勉強するのがいやだったりする「学校に行かない子」の二つだ。いずれも、不登校の状況には変わない。

私は、今まで数名の不登校児童と出会ってきた。最初に出会った子は、女の子だ。どうして、その子が学校に来ないのかわからなかった。そして、わからない原因を探ることが、その子を不登校から開放してあげる一番の策だと考えていた。私のした行動は、直接その子に原因を尋ねたり、保護者に、登校させるよう要求したことだった。結果は、何も改善しなかった。むしろ、悪化させたといってもよかったぐらいだ。

当時の私は、自分の努力が報われず落胆し、同時に焦りもあった。そして、その失敗の原因を「その子が、がんばらないからだ」とか「家庭での指導が甘すぎる」と考えるようになっていた。と同時に、自分にはどうすることも出来ないというあきらめの気持ちで一杯だった。結局、その子は、小学5年生から中学2年生まで不登校から開放されなかった。

翌年も、小学6年生の女の子を受け持った。その子は、完全に不登校になってしまった訳ではなかったが、いつ不登校になってもおかしくない状況だった。学校に来るかどうかは、子どもが潜在的に持っているエネルギーを頼りにするしか他はなかった。その子どもにも、積極的に関わり、卒業まで漕ぎ着けたが、私にとって、それが成果や成功であるはずはなかった。なぜなら、私自身、不登校児童の気持ちを理解したり、その子を持つ親の気持ちに寄り添えたとい

う実感が伴わなかったからだ。

当時の私に何が足らなかったのだろう。それは、人の気持ちをわか
るための条件が揃っていなかったのだ。特に、その人と同じ体験を
している、という条件が欠けていた。私自身不登校の経験もなく、
兄弟や親戚をはじめ娘や息子もそうでなかったからだ。

このような状況では、もう一つの感情は決して開かれることはない。
そう実感した。

六、涙のわけ「その二」

その日は突然やってきた。

使い古されたこの言葉が、なぜかしっくりなじむ。そう言わずにお
れない気持ち体が中を駆け巡っていた。

「どうして、どうしてなの」

と泣きながら何度も私に問いかける妻。

その涙は、これからの不安を流したいと無言で訴え、それを理解し
ないと拒み続ける心の抵抗が形に表れたものだった。

もう一つの感情が開かれる出来事が起きた。それは、今まで経験し
たことのない苦悩の日々でもあった。不登校児童を持つ親の苦しみ
が分かった時でもあった。

毎晩、妻と語り、今までの子育てを振り返りながら一緒に涙した、
自分を責め、誰かに助けを求めようとした。わらにもすがりたい
気持ちだった。たくさんの人からアドバイスを貰い、カウンセリン
グも受けた。まるで、地獄のような砂の迷路に放り投げられたアリ
のようだった。訳もわからず、もがいていた。毎日が暗く、普通の
幸せが無くなったような気さえた。職場では、不登校児童との面
談を重ねた。不登校になりそうな児童へは、毎日家まで迎えに行き
登校させた。そうする他に、私には何も出来なかった。ただそうす
ることで、「きつと、あいつも学校へ行ってくれる」と願い、自分

の感情を正常に保とうとしていたように思える。

しかし、今でも私に与えられた試練は、まだ終わっていない。

でもこの貴重な体験で、私はもう一つの感情を開くことが出来た。

そして、こうして自らの人生を見つめ直すきっかけにもなった。人のありがたさを改めて感じることも出来た。少しだけ人にやさしくなることも出来た。だから、悔いはない。辛いとも思わない。これが私の人生そのものだから・・・

七、愛する人へ

誰にも苦しいときは必ずやって来る。そして、突然やって来る。過ぎ去ってもまたやってくるかもしれない。それでも、必ず乗り越えられる。そう信じるのが、生きていくということ。そして、人の気持ちが変わる人になるということ。

それを教えてくれているのが、君自身だ。

それ自体が愛する人から愛する人へのメッセージになるんだ。私は、そのメッセージを喜んで受け取りたい。だから、君は、そのメッセージを思いっきり発信すればいい。

それが家族なんだ。

それが親子なんだ。

それが人間なんだ。

そう実感できるまで発信続ければいい。

がんばれ。愛する君よ。

父

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8210p/>

軌跡　～～不登校の息子へのメッセージ～～

2011年1月10日00時09分発行